

令和3年度 学校評価総括表 奈良県立桜井高等学校

教育目標	普く 絶えず 正しく ○ 全てにわたって、いつでも、どこでも、自分にも、誰にでも、正しく、最善をつくす。 ○ 何事にも、自らよく考え、よく判断し、よく実践する。 具体的目標 (1) 正しくあれ ・ ・ ・ ・ ・ 確かな学力と正しい判断力・実践力を身に付ける。 (2) 健やかであれ ・ ・ ・ ・ ・ 若者らしく、心身ともにたくましい身体をつくる。 (3) 心豊かであれ ・ ・ ・ ・ ・ 自己敬愛に基づく人間関係の醸成と豊かな情操を育てる。	総合評価
学校目標	◎求める生徒像 「社会で生きる力」を育む<「自立した社会人」を目指して> ○ 「正解」のない新しい社会を生き抜く力を身に付ける生徒 ○ 対人関係力・協調性・コミュニケーション力を備える生徒 ○ 目的意識をもち、自分自身を変革する意欲をもつ生徒	◎目指す学校像 「ともに学ぶ場」を創る<「学びの中心」として> ○ 生徒相互で学び合う、知的な学びの共同体づくりに努める学校 ○ 高い専門性と指導力を有し、生徒や保護者から信頼を得る学校 ○ 地域社会や外部機関と連携し、「地域とともにある学校づくり」を推進する学校

令和2年度の成果と課題 本年度重点目標

昨年度は「志を高く、自己を啓き、未来を拓こう」を重点目標に、「高い目標を掲げ、知識や能力の開発に取り組み、自分の未来を展望できる」生徒の育成を目指して取り組んだ。コロナ禍により、学習活動や特別活動・課外活動が様々な制限を受けながらも、ノーチャイムの実施、朝のSHRでの学校生活を振り返り文章化すること、スコラやスタディサプリ、グループクラスルームの活用などに取り組み、成果をあげた。本年度は「自己を変革する『勇気』と自己を受け入れる『人間愛』を育み、卓越した『探究心』で未来を拓く」の視点で、より一層内容を充実させることを課題とし、本年度の学校経営に反映させ、計画的に取り組む予定をしている。	自己を変革する「勇気」と自己を受け入れる「人間愛」を育み、卓越した「探究心」で未来を拓く ～「正解」のない社会を豊かに自分らしく生きるために～	B
具体的目標		
○ 様々なことに興味・関心をもち、自分の知識や能力の開発や伸長に意欲的に取り組むとともに、将来のために自己を変革する勇気をもつ生徒を育てる。		
○ 将来に明確な目標をもち、その実現を目指して日々の生活や学習の中で時間と目的をマネジメントし、失敗しても何度でも挑戦する粘り強さをもつ生徒を育てる。		
○ 心身ともに健全で、安全教育や食育を通して安全や健康を自分で管理し、将来にわたり維持増進しようとする生徒を育てる。		
○ 他者とコミュニケーションを積極的に行い、協働することを通して、集団を動かすリーダーシップをもつ生徒を育てる。		
○ 人権感覚に優れ、周囲の状況や他者の気持ちを理解し、相手の立場を想像、配慮し、多様性を認め合うことのできる生徒を育てる。		
○ 学校行事や部活動の活発化・効率化を図り、集団や社会に貢献する意義を理解し、積極的に貢献する姿勢と意欲をもつ生徒を育てる。		
○ 「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善を行い、課題を客観的、科学的に捉え、思考力、判断力、表現力を高め、卓越した探求心をもった生徒を育てる。		
○ ICT教育を推進し、将来、「正解」のない社会にあって、どのような職業に就いても活用できる汎用的スキルを身に付け、未来に生かすことのできる生徒を育てる。		

評価項目	目標(評価小項目)	具体的方策・評価指標(昨年度の数値)	自己評価結果	成果と課題	改善方策等	学校関係者評価	
重点目標の実現	自己を変革する「勇気」～何度でも挑戦する粘り強さを身に付けさせる～	「自己管理能力」を身に付けた生徒の育成を図る。あらゆる場面でメモすることを徹底し、1週間の振り返りを行い、次週の計画をたてられるようにする。 A 1年「スコラを使う前と比べて、1週間の振り返りをするようになった」と答える生徒 60%以上(29.0%) A 1年「スコラを使う前と比べて、1週間の計画を立てられるようになった」と答える生徒 60%以上(33.8%)	D C B	「システム手帳『スコラ』に関するアンケート」結果(対象1年生,10月実施) A 1年「スコラを使う前と比べて、1週間の振り返りをするようになった。」 29.1%(前年29.0%) A 1年「スコラを使う前と比べて、1週間の計画を立てられるようになった。」 37.5%(前年33.8%)	昨年度「スコラ」のあり方について検討した結果、今年度は1年生全員と2、3年生は希望者のみが使用することとした。本年度まで「自己管理能力」を身に付けることを生徒たちに求めてきたが、次年度入学1年生より、BYOD導入により、経費の面、活用法の検討により、次年度は「スコラ」は購入しないこととした。(現1年は4名、現2年は2名購入)。BYODの活用の中で、「自己管理能力」が取り組みを模索していく。また、ポートフォリオや「Good Bad Next Time」との連携を考えていく。	○新型コロナウイルスの影響により、全ての面において活動が制限され、たいへんな現状だと拝察いたします。しかしながら学校全体の取組は素晴らしいと思います。より一層の充実した取組を望みます。今後それぞれの目標に向かって成果はもろんのこと、課題等の改善に力を注いでいただきたいと思います。	
		進路対策講座やWeb講座「スタディサプリ」を利用した学習習慣の定着を図り、強い意志で継続させる。 A スタディサプリは活用できたと思う生徒 50%以上(47.0%)	B	「スタディサプリは活用できたと思う」と回答した生徒は 47.4%(1年:47.2% 2年:55.4% 3年:39.5%)。本年度は、新型コロナウイルスの影響もあり、スタディサプリを利用する機会が増えている。	年度当初の自宅待機期間中にスタディサプリの配信機能を利用したことから、例年よりは活用できているように感じる。来年度も配信機能を有効に利用する		
		日々の生活や学習の中で時間と目的をマネジメントできる力を養う。 A チャイムの有無にかかわらず、自分から動くことを心がけ実践する生徒 90%(87.5%)	A	「チャイムの有無にかかわらず、自分から動くことを心がけ実践する生徒」(昨年度91.0→):90.0%	本校では、ノーチャイムを実施し10年目を迎えた。自分で時間を意識して、一人一人が自ら行動できるようにしていく。日々の心がけと継続的な実践が『自分を守る』ということに繋がっていることに気づかせていく。		コロナ禍において社会参加活動を行うには様々な制約があるが、関係機関と綿密に事前調整を重ねて、安全な方法で積極的に実施していく。
		生徒の社会参加活動の機会を増やし、地域社会への関心を高め、連携を深める。 A 生徒による施設訪問、交通安全啓発活動等を5回以上実施(5回) A 様々な活動を通して主体的な社会参加活動の意識を高めた生徒 70%以上(47.2%)	A B	上半期はコロナ禍により多くの活動が中止となったが、10～12月で生徒による施設訪問5回、交通安全啓発活動等への参加3回、ウインターユースコンサート1回の計9回 卒業アンケート、学年末アンケートで57.8%(1年58%、2年56%、3年56%)	コロナ禍において社会参加活動を行うには様々な制約があるが、関係機関と綿密に事前調整を重ねて、安全な方法で積極的に実施していく。		活動できる回数を増やせば、自ずと意欲が向上する生徒は増えてくる。
	人権教育ホームルーム活動等において、生徒が自他ともに尊重する意識を高め、積極的に活動できるような展開を考え、教材を作成する。また、講演会などを通して命の大切さについて考えさせる。 A 「人権や命について学ぶことが多かった」と答える生徒 90%以上(92.8%)	A	7月のアンケートで、「人権や命について学ぶことが多かった。」と答えた生徒が94.2%いた。卒業アンケート、学年末アンケートで94.7%(1年96%、2年92%、3年96%)	2、3学期の人権委員の活動、人権教育HRをさらに充実させる。また、人権を確かめ合う日等をもっと活用した取り組みを行う。			
	日常生活の中で、周囲の状況や相手の気持ちを理解しつづ、自分の意志をもって行動できる力を養う。 A 人より先にあいさつをすることを心がけ、実践している生徒 90%(82.3%)	B	「人より先に挨拶をすることを心がけ、実践している生徒」と答える生徒(昨年度81.3→):本年度中間報告 83.1%。卒業アンケート、学年末アンケートで86.1%(1年88%、2年85%、3年85%)	いつでも、どこでも、何度でも、気持ちよく、心を込めて「あいさつをする」ことを働きかける。自らも実践し続ける。			
	教科指導、ホームルーム等あらゆる場面で、目標設定に関する話題を提供していく。 A 卒業時、将来の目標が「はっきり」または「ほぼ決まった」と答える生徒 90%(85%) A 第2学年末に、卒業後の進路希望を「はっきり」または「ほぼ決まっている」と答える生徒 80%(76%)	B B	卒業アンケート 74.2% 学年末アンケート 77.6%	教師が授業やホームルームなどあらゆる時間に、積極的に将来に関すること、目標設定に関するこの話題提供を行っていく。「総合的な探究の時間」の中で、自らの目標を探し出す姿勢をつけさせる。	コロナ禍もあり運営が難しかった。まずフューチャーセンターについて知らない生徒も多いと思うので周知から始め、運営の見直しを図る必要がある。第2フューチャーセンター(中庭)の利用を中心に利用を促す方向で考える。生徒会役員をはじめ生徒の意見を聞きながら、構想を具体化していく。		
	学校生活の充実だけでなく、学力の向上や進路実現にも役立つように様々な情報交換の場を設ける。また、フューチャーセンターのより有意義な活用のしかたを生徒会役員を中心に考え、改善を図る。 A フューチャーセンターで情報を得たり、意見や情報を書いたりしたことがある。50%(22.1%) A フューチャーセンターが役に立っていると感じる生徒 60%以上(52.0%)	D C	「フューチャーセンターで情報を得たり、意見や情報を書いたりしたことがある」と答えた生徒(1年:6.2% 2年:19.9% 3年:24.9% 全体:17%) 「フューチャーセンターが役に立っていると感じる生徒」(1年:35.3% 2年:51.0% 3年:54.9% 全体:47%) 卒業・学年末アンケートの結果は減少傾向。	コロナ禍もあり運営が難しかった。まずフューチャーセンターについて知らない生徒も多いと思うので周知から始め、運営の見直しを図る必要がある。第2フューチャーセンター(中庭)の利用を中心に利用を促す方向で考える。生徒会役員をはじめ生徒の意見を聞きながら、構想を具体化していく。			
	社会の出来事に興味関心をもち、様々な視点でものごとを捉えることができる生徒を育てる。 A 社会の出来事に興味関心があり、様々な方法でニュースに触れることが多いと答える生徒 70%以上(61.5%)	B	「社会の出来事に興味関心があり、様々な方法でニュースに触れることが多い」と答える生徒が66.0%(1年:64.4% 2年:61.6% 3年:72.1%)である。6月の調査より増加した。	教師が授業やホームルームなどあらゆる時間に、社会に関する情報提供を行っていく。「総合的な探究の時間」の中で、自らの目標を探し出し、課題を解決する力を醸成する。			
	学習指導	授業改善と指導力の向上	シラバスや授業アンケートを活用しながら、個々の教員が指導方法や指導内容の改善・充実を図るとともに、研究授業週間を設け、全教員が授業公開を行い、指導力の向上を図る。 A 「授業アンケート」における生徒の授業満足度 平均85%以上(2学期:89.7%) A 「卒業アンケート・学年末アンケート」における学力向上実感度 平均75%(全体:72.3% 1年:72.3% 2年:67.1% 3年:77.5%)	A A	A「授業アンケート」結果 1学期(全体 87.1% 1年:86.6% 2年:88.5% 3年:86.1%) 2学期(全体 90.8% 1年:89.1% 2年:92.4% 3年:91.8%) A「卒業・学年末アンケート」結果 全体:76.8% 1年:72.3% 2年:77.2% 3年:74.3%		・本年は、「生徒の授業満足度」、「学力向上実感度」ともに目標数値に達した。今の状況を維持しながら、公開・研究授業週間を軸として、より一層の指導方法・内容の改善充実の推進を図りたい。来年度入学生からの評価方法の大変革に対して、いかに生徒個々に応じて「評価」を返すことができるか研修等を通じ本校としてのスタイルを確立したい。
家庭学習習慣の定着		「小テストを実施する」、「適正量の課題を課す」など生徒に適正な負荷をかけることに加えて、「スタディサプリ」を活用させることで、予習・復習の指導を徹底する。 A 1日平均60分以上自主的な学習をする生徒 75%以上(全体:53.5% 1年:51.0% 2年:40.4% 3年:68.8%)	C C	「学校生活意識調査」結果 1学期(全体:43.3% 1年:36.0% 2年:29.4% 3年:64.8%)	全体で数値が下がった。1・2年生の数値は昨年をかなり下回っている。次年度は、日々の家庭学習が定着し、学力向上が見られるように取り組む。		
特色あるコース	書芸コースの充実	早期から、より深く、より深い専門的な学習に取り組み、専門科目へと発展させる。卒業書作展においては3年間の集大成の場であるとともに、2・5期生として、3年間の学習への深い想いと強い意思を持ちながら、歴史と伝統を踏まえ、集団としての力を結集するとともに、各自の表現目標に基づいた作品制作を行い、充実した展覧会を行う。 A 書芸コースで学んだ満足度 95%以上(82.4%) (ほぼ満足を加えると、100%) A 卒業書作展への満足度 95%以上(91.2%) (ほぼ満足を加えると、100%)	B B	1年生の「書道1」(3単位/T/T)で「漢字(2単位)」と「仮名(1単位)」の学習を年間を通して固定し8年になる。4名の教師が指導にあたる利点を生かし、年々内容も充実し、2年次以降の専門科目にその学習効果が表れている。特に「仮名」の学習においてそれが顕著である。専門科目の更なる充実を模索しながら進めている。しかし、本年度はコロナの影響で1・2年生の分散登校期間での遅れが気になるが、電子黒板の導入により、これまでは一味違う指導が可能になった。また、早期より専門的な学習に取り組み、卒業書作展に向けて準備を進めている。2年ぶりに行った学校説明会は、44名の参加があり盛況であった。 A 書芸コースで学んだ満足度 94.3% A 卒業書作展への満足度 94.3%	1・2年生は、コロナ禍で学習の遅れが心配されたが、幸い27名・28名という少ない人数での授業・実習となり、進度の方は例年と変わらない程度に回復している。加えて、電子黒板の導入により大きな成果があった。来年度以降も電子黒板の強みを生かした授業を展開していきたい。また、専門的な学習をより進めるため、教材の精選、効果的な指導方法の在り方などを模索しながら進めていく。 集大成である卒業書作展に向け、早期からさまざまな場面で書芸コースの一員としての意識付けを行っていき、とりわけ専門科目の授業を通して、知識、技法をより一層高め、更なる充実を図っていく。		
	英語コースの充実	オンライン・イングリッシュキャンプや修学旅行などを通して、できるだけ生きた英語に触れ、英語による相互理解の機会を充実させる。また、英語学習を通じて世界に視野を広げ、グローバルな視野に立って物事を考えられる生徒を育てる。加えて、GTECにおいて、1・2年生は年間2回(1回目3技能アセスメント版、2回目4技能アセスメント版)、3年生は1回(4技能検定版)を受験させることで実践的な英語コミュニケーション能力を測定し、英語学習へのモチベーション向上を図る。 A 英語コースの活動で、生きた英語によるやりとりをする機会が充実していたと答える生徒 80% A 英語コースの授業で、世界の情勢や問題に目を向け、考えるようになったと答える生徒 60% A 英語コースの各学年のGTECによる英語能力が以下の結果を達成する 1年生 CEFR-J A2.2以上 15人以上(6人) 2年生 CEFR-J A2.2以上 30人以上(20人) 3年生 CEFR-J B1.1以上 15人以上(11人)	A A B D	オンライン・イングリッシュキャンプについてアンケートをとったところ、2学年あわせてほぼ100%の高評価であった。特に2年生は、英語コース独自の英語研修修学旅行が実施できなかったため、オンラインをとおして直接外国人と英語のみでやりとりをするこの経験が、少しでもそれを補えるものになった。1年生については、英語学習のモチベーションにつながったという意見が多く、その目的を達成できた。授業ではコミュニケーション英語や英語会話を積極的に世界の情勢に目を向ける話題を扱っており、生徒の視野は少しずつ広がっており、思考も深まりつつある。 英語コースの活動で、生きた英語に触れ、英語による相互理解の機会を充実させることについて、そのような機会が充実していたと答える生徒は、2年生89.7%、1年生78.6%で、全体として84.2%であった。また、英語コースの授業を通して世界に視野を広げ、グローバルな視野に立って物事を考えられる生徒を育てることについては、世界情勢や問題に目を向け、考えるようになった生徒が、2年生72.4%、1年生67.8%で、全体として70.1%であった。 GTECについては、3年生(6月受験)CEFR-J B1.1以上9名、2年生(1月受験)CEFR-J A2.2以上23名、1年生(1月受験)CEFR-JA2.2以上6名であった。	コロナ禍での英語コースの活動は、コミュニケーションを要する点で制限が多い。イングリッシュキャンプはオンラインという初の試みができたが、全体的に生の交流の機会が皆無に近いところを改善していく必要がある。また、授業活動だけでなく、生の交流を通して異文化理解やグローバルな視野が育成されていくため、そのような機会をいかに増やせるか方策を練る必要がある。		
	自主学習をサポートする環境づくりと読書習慣の定着	多目的な図書館利用の充実を図る。特にICTを活用した授業での利用を推進する。あわせて本の貸出数の増加を目指す。 A 図書館の利用者数 5,000人以上(2,756人)、本の貸出数1,500冊以上(1,288冊)、図書館を貸出・閲覧業務以外で利用した回数50回以上(32回)	D D D	図書館の利用制限もあり、利用者数、本の貸出し数共に伸びていないが、コロナ後の図書館のあり方を考えながら多面的に工夫を加えていきたい。 A 図書館の利用者数 2827人、本の貸出数832冊、図書館を貸出・閲覧業務以外で利用した回数19回	来年度もコロナの影響が続くのなら、アクリル板の設置や図書館に隣接する昇降口の上部を野外閲覧コーナーする工夫などを行う。		
	読書指導					○家庭学習の定着に関しては、個別最適な学びが提唱されている中では、いろんな取組が必要であると考えます。よろしくお願ひします。	

評価項目	目標(評価小項目)	具体的方策・評価指標(昨年度の数値)	自己評価結果		成果と課題	改善方策等	学校関係者評価
生徒指導	基本的な生活習慣の確立	自分一人でも継続的に実践するという強い意志を育むとともに、時間を守り自律的な生活習慣を身につけた生徒を育てる。 A 「いつも授業の開始と終了時の挨拶(起立・礼)を自ら姿勢正しく行った」と答える生徒 85% (83.1%)	B	B	「いつも授業の開始と終了時の挨拶(起立・礼)を自ら姿勢正しく行った」と答える生徒(昨年度83.1→)84.1%	服装を正し、心を込めて礼ができるように促したい。コロナ禍であっても、対面で授業が出来ることの喜びを感じ、一人一人に自律的な行動が出来るよう働きかけていく。	○各種アンケート結果、資料によると、生徒たちは先生方の思いを受け止め、しっかりと成長しているように感じます。工夫して実施された文化祭・体育大会の楽しそうな生徒さんの様子を拝見し、とても安心しました。コロナウィルスの終息までもう少し時間がかかると思いますが、今後ともよろしく願います。
		自立した社会人を目指し、自発的にルールやマナーを守り、社会人の一員としての基本を身につけた生徒を育てる。また、周囲の状況や他人の気持ちを理解し、相手の立場を想像し、配慮できる生徒を育てる。 A トイレのスリッパは必ず履き替えると答える生徒85%(83.0%) A スリッパが乱れていたらきちんとそろえる生徒 80%(67.0%)	B	B	「トイレのスリッパは必ず履き替える」と答える生徒(81.4→83.0):81.6	生徒一人一人が公共心を意識し、自ら実践できるように促したい。横着なスリッパの履き方をしている生徒がいることを踏まえ、他人の気持ちを想像する機会をもたせる。	
	生徒が、自らの悩みを客観的に捉え、自ら考え、適切に対処できる力を育成するとともに、相談できる環境を整える。 A 「悩みを相談する場所があるまたは人がいる」と答える生徒 85%以上(85.7%)	B	B	「スリッパが乱れていたらきちんとそろえる」と答える生徒(67.2→67.0):67.7%	次に使う人を思い揃える。先を想像することにつなげていく。また、物を大切にすることを育てる。		
キャリア教育	自らの将来を考える意識の向上	各学年における進路行事やLHR、「総合的な探求の時間」などを通じて、自己を振り返り、さらには自らで変革し、将来を展望する機会を増やす。特に1年は類型選択が進路を見据えた選択ができるように支援する。 A 「進路や将来の仕事、生き方について考える機会が多い」と答える生徒 85%以上(91.2%)	A	A	A	「進路や将来の仕事、生き方について考える機会が多い」と回答した生徒は93.8%(1年:91.5% 2年:95.2% 3年:94.6%)で昨年度(91.2%)からはやや増加した。毎週金曜日に「GoodBadNextタイム」を設け、一週間の自分を振り返り、その中から今の問題点に気づかせる取組を継続している。次第に浸透し、生徒の書いた内容を目を通してくださる担任が増えているように思う。今後の成果をみたい。	新型コロナウィルスの影響で、進路に関する集会有り開催できなかった割には、機会が多いと答えてくれた生徒が増えている。情報が少なかった分、かえって自分の進路を見据えてくれたのかもしれない。今の高い意識をこのまま維持できるような意識付けを続ける。
		ホームルームや進路説明会等において個々に応じた適切な情報を提供するとともに、キャリアデザインルームの活用等を通して、自分の将来を主体的に考え、夢と目標をもって進路実現に向けて努力する生徒を育てる。 A 「進路行事(説明会やガイダンス等)やCDRで自分の進路に関する情報を得ることができた」と答える生徒 70%以上(69.5%)	A	A	A	「進路行事(説明会やガイダンス等)やCDRで自分の進路に関する情報を得ることができた」と回答した生徒は71.2%(1年:75.0% 2年:71.4% 3年:67.1%)で昨年度(69.5%)からは増加した。	新型コロナウィルスの影響で進路説明会やガイダンスのいくつかが中止になってしまった。そんな中、今年度は進路の相談に訪れる生徒が全学年を通じて多く見受けられた。また、一学期中は多数の生徒がCDRを利用し、放課後は満席になることが多かった。訪れやすい進路指導室への環境づくりに力を注いでいく。
人権教育	自主活動の充実	人権委員の活動として全員参加のFreeや広報紙の発行を行うとともに、人権学習会や調査活動、募金活動等に広げていくことで人権意識の深化を図る。 A 実施回数 各学期2回以上(各学期2回)	B	B	B	6月に、第1回Free、人権問題学習会を実施し、人権委員の人権意識の向上に務めることができた。また7月には、第1回Free、人権問題学習会、人権講演会・文化鑑賞会についての生徒の感想等を掲載した広報誌を、12月には第2回Freeの内容に関する生徒の感想等を掲載した広報誌を発行することができた。	人権委員の活動を促進するために、委員会活動だけでなく、人権を確かめ合う日の取り組みも人権委員に運営させ、委員会活動の活性化を図る。
		生徒たちが率先して主体的に活動できるよう学校行事や部活動を計画し、行事や部活動の質を高める。 A 部活動に積極的に参加すること80%以上(74.6%) A 学校行事で良い思い出を作ること80%以上(79.9%) A ボランティア活動に参加すること80%以上(68.7%)	B	B	A	学年末・卒業アンケートの結果 「部活動を積極的に参加すること」(1年:80.9% 2年:74.8% 3年:71.2% 全体:75.6%) 「学校行事で良い思い出を作ること」(1年:85.9% 2年:69.2% 3年:78.6% 全体:77.9%) 「ボランティア活動に参加すること」(1年:78.1% 2年:72.9% 3年:79.5% 全体:76.8%) 部活動についてはやや増加傾向、学校行事についてはやや減少傾向、ボランティアについては8%程度増加。	部活動については、1年生が序盤に退部した場合、ほかの部活動を勧めるなどしたうえで、途中入部の受け入れ体制を整える必要がある。学校行事についてはなるべく実施の方向で検討を重ねた結果だが、来年度こそ従来に近い方法で実施できるよう検討していく。ボランティアについてはさらに参加人数が増えるよう工夫する。
健康教育	健康管理能力の育成	学校は「集団生活の場」であり「みんなで高め合う場」であることを生徒会役員に深く自覚させ、より規律ある学校生活をリーダーとして皆に促すとともに、互いにコミュニケーションを取りながらグループ間の関係を調整しつつ、全体を円滑に進めていくことができるファシリテート能力を養う。 A リーダー研修会 4回(3回)	A	A	A	生徒会リーダー研修会については6月に役員のものをも1回、各種委員会の委員長を含めた拡大リーダー研修会を1回、8月に文化祭を見越した生徒会役員のみ研修を1回、12月に3学期行事を見据えた研修を1回行った。3月に来年度行事を見据えた研修を行う予定で、今年度は5回行うことになる。	継続して生徒会役員の手を伸ばすために研修を行い、生徒会役員を積極的に行事の企画運営に関わらせていく。
		生徒が、自ら健全な心身の自己管理ができるよう、生徒個々や学校課題に応じた保健情報等を生徒・保護者に積極的に提供し、適切な指導を行う。 A 「健康に関する指導が適切」と答える生徒 85%以上(86.0%) A 「健康に関する指導が適切」と答える保護者 95%以上(95.0%)	B	A	A	健康関係指導〔医療受診勧告、色覚検査、熱中症予防啓発活動、心臓蘇生指導、保健啓発活動(保健だより)〕の実施、及び感染症予防啓発活動やそれに関わる人権啓発を図り、一定の成果を得た。 「健康に関する指導が適切」と答えた生徒 85.7%、保護者94.0% 全てに項目において特に1年生の低値が顕著である。	今後もコロナウィルス感染症を含め、状況に合わせて適時に健康に関する情報提供や啓発活動等を実施し、指導を継続する。また、入学時から特に生徒には丁寧な指導を、保護者にはきめ細やかな情報提供が必要である。
安全教育	安全・安心に対する自己管理意識の向上	健康について、生徒が自らの健康状態を客観的に捉え、自ら考えて健康管理に努める実践力の向上を図る。 A 年間保健室来室件数800件以下(2/25まで530件) A インフルエンザ感染による出席停止生徒数50人以下(2/25まで0人)	A	A	A	保健室来室件数については、昨年度より増加であったが、昨年度同様にインフルエンザによる出席停止生徒は、コロナ感染症に懸念されているインフルエンザ感染による出席停止がなかった。しかし来年度以降も緩むことなく感染症予防のため、週単位の啓発活動等を実施し、生徒が自らの健康管理に努める実践力向上を進める。また体調面での留意に加え、心身の部分での来室も増加傾向にあり、今後、教育相談等の他、身・係と連携しながら対応すべきである。	生徒自身の感染症への意識が高かったがそれ以外の理由だったのかは分からないが、例年と同様に冬場に懸念されているインフルエンザ感染による出席停止がなかった。しかし来年度以降も緩むことなく感染症予防のため、週単位の啓発活動等を実施し、生徒が自らの健康管理に努める実践力向上を進める。また体調面での留意に加え、心身の部分での来室も増加傾向にあり、今後、教育相談等の他、身・係と連携しながら対応すべきである。
		登下校指導や交通安全講習会等を充実させ、交通ルールやマナーを自律的に遵守する生徒を育成する。 A 「日常的に交通ルールやマナーを遵守し実践している」と答える生徒 95%以上(97.2%)	A	A	A	「日常的に交通ルールやマナーを遵守し実践している」と答える生徒(90.9→93.1→97.4→97.1→97.2→)96.1%	登下校指導、交通安全講習会、自転車通学生生会を実施し、緊張感をもって行動できるようにする。地域の方々、近隣学校、警察自動車学校等さらなる連携を深める。
環境美化	自主的な美化活動の推進	避難訓練等を通して防災意識を高め、自分で自分の身を守る力を育てる。 A 「安全や事故防止の指導が適切」と答える生徒 95%以上(88.0%)	B	A	A	「安全や事故防止の指導が適切」と答える生徒(82.2→79.5→86.1→85.9→88.0→)86.7%	種々の集いやHRの機会を設け、生徒、保護者、教職員の防災意識を高める。
		教職員の危機管理意識を高めるとともに、教職員一体となって安全教育に取り組む。 A 危機管理体制が整備され、非常時に教職員が適切・迅速に対応できる。100% (82.6%)	B	B	B	「事故、事件、災害等に対応する危機管理体制が整備され、非常時に教職員が適切・迅速に対応できるようにしている。」(75.5→80.0→84.3→82.6→)92.6%	日々の安全確認と防災、防犯に対する意識高揚に努める。コロナ禍で延期になっている防犯についても検討する。
開かれた学校づくり	学校情報の提供と成果の発信	全生徒が清掃活動を通して勤労の尊さを学び、自分たちの学校を大切にできる気持ちをもたせる。 A 校内を美しく保つことを意識している生徒 90%以上(94.1%)	A	B	B	美化委員による早朝清掃や部活動単位での主体的清掃活動に取り組んだ。 「校内を美しく保つことを意識している」と答える生徒は91.2%	日々の教室等の清掃活動を通して、資源を大切にすることを育てていけるよう、教職員に呼びかけていく。
		環境美化を啓発するポスターを作成・掲示し、美化意識の向上を図り、他に配慮し実践できる生徒を育てる。 A 「校内の環境がいつも美しい」と答える生徒85%以上(80.0%)	B	B	B	ゴミの分別等について、定期的に啓発し、生徒の意識向上に努めた。 「校内の環境がいつも美しく整備されている」と答える生徒は75.6%	ゴミの分別について、生徒のより一層の美化意識向上のために、ポスター掲示や啓発を継続して行う。
教職員の働き方改革	勤務時間管理の徹底	広報活動を積極的に行うことで、本校の教育活動を広く紹介し、県民の本校への関心を高める。 A 新聞等のマスメディアで取り上げられた本校の教育活動 25件以上(21件)	D	C	C	報道資料を積極的に配布している。 教育活動に関する取材等:10件(新聞8件 テレビ2件)	報道資料の積極的配信を行う。広報業務を取り扱う部署の新設による、積極的な広報活動を行う。
		中学生にとってわかりやすく、興味をひく、e-オープンスクールへの動画を作成し、配信する。 A e-オープンスクールへの視聴申込延べ数 800件以上(740)	C	C	C	e-オープンスクールへの視聴申込延べ数は630件。昨年の内容より、バージョンアップをはかったが、申込延べ数は減少した。	今年度も学校説明会等で中学生やその保護者に、e-オープンスクールの宣伝を行い、多くの中学生が桜井高校を知る機会を増やす。
経費の節減	学校運営経費の効率的な執行	職員がCMS活用による情報発信の一層の拡大を図り、生徒、保護者を中心に必要な情報を提供する。 A 「桜井高校のホームページを見ている」保護者50%以上(45.0%)	B	B	B	保護者アンケート 「桜井高校のホームページを見ている」48%。加えて、ホームページアクセス状況は一昨年度と比べて大幅増となっている。CMSの運用面での知識は蓄積できた。情報発信をしようとする分掌・部活動をさらに増やしていきたい。	教員業務支援員をホームページの記事・写真をアップする窓口することにより、頻りに更新していく体制はできあがった。各分掌等の担当者にさらに啓蒙をはかる。
		業務の適正な配分と効率化により、全教職員の時間外従事時間の削減を図る。 A 時間外従事時間が月45時間の教職員のべ人数 56人以下(78人) A 時間外従事時間が年360時間の教職員の人数 7人(14人)	C	C	B	時間外従事時間が月45時間超の教職員のべ人数は90人、年360時間超は13人(2月末)。個々の教師に効率よい業務執行と働き方に対する意識改革をさらに進めていく必要がある。	今年度6月から導入された教員業務支援員による業務補助を有効に活用していく体制を構築して、教員の業務時間の短縮をはかっていかなければならない。
第1学年	学習意欲の育成	業務全般について関係職員が協働して対応する体制をつくり、職場環境の改善を行い、健康障害の予防を図る。 A ストレスチェック集団分析における総合健康リスク85以下(89)	B	B	B	ストレスチェック集団分析における総合健康リスクは96。	協働して業務に対応する体制づくりと職場環境の改善を行っていく。また、カウンセリング窓口を周知し、受けやすい雰囲気をつくっていく。
		基礎・基本を大切にしながら学習を定着させ、家庭での予習・復習の習慣を確立させる。 A : 1日平均60分以上自主的な学習をする生徒 70%以上(51.0%)	D	D	D	4月~1月の全体の光熱水量全体の平均は昨年度より0.9%増だった。 コロナ禍で、長期の在宅教育期間や臨時休業があった昨年度との比較は難しいが、内訳は、電気使用量9.4%増、水道使用量1.8%減、ガス使用量4.9%減となった。今年度はここ数年の冬の中でも厳寒の日が多かったことに加え、コロナ禍での感染防止対策のための教室換気によって冷暖房の効率が悪くなったことで、電気使用量が嵩んだが、やむを得ないことであった。水道使用量の減については、コロナ禍で9月12日までの夏期休業期間の延長や9月の分教登校により9月期の利用が少なかったことが要因にある。	コロナ禍の長期化に伴う感染防止対策を行いながら冷暖房の使用量の増加はやむを得ないが、経費の効率的な執行の観点から、光熱水費以外の経費(消耗品など)についても、教職員の協力と理解を得ながら、学校全体で節減に向けて取り組んでいく。
第2学年	規範意識・社会性の育成	中学生にとってわかりやすく、興味をひく、e-オープンスクールへの動画を作成し、配信する。 A e-オープンスクールへの視聴申込延べ数 800件以上(740)	C	C	C	保護者アンケート 「桜井高校のホームページを見ている」48%。加えて、ホームページアクセス状況は一昨年度と比べて大幅増となっている。CMSの運用面での知識は蓄積できた。情報発信をしようとする分掌・部活動をさらに増やしていきたい。	今年度も学校説明会等で中学生やその保護者に、e-オープンスクールの宣伝を行い、多くの中学生が桜井高校を知る機会を増やす。
		自らの計画し、強い意志をもって学習する習慣を定着させる。 A 1日平均60分以上自主的な学習をする生徒70%以上(40.4%)	D	C	C	1日平均60分以上自主的な学習をする生徒 40.4%→29.4% 自分の将来の目標をもっている生徒 77.2%	年度初めgoogleclassroomやスタディアリを利用して自主的に学習して欲しかったが利用方法と成果がしっかりとアナウンス出来なかった。できるだけ早い段階で自主的な学習の習慣づけをさせたい。1年時の類型選択の段階で、将来の自分について考えさせる機会を増やし意識づけをおこなう。
第3学年	自己の進路を実現させ、自立した社会人を目指す	自分の将来に対する意識の向上に努める。 A 自分の将来の目標をもっている生徒 80%以上(76.0%)	B	B	B	充実した学校生活を送れた生徒 80.4%	学校行事が縮小されたりする中、工夫を凝らし実施していくことが不可欠である。
		中堅学年としての自覚を高め、修学旅行や学校行事・部活動、社会活動等を通して、集団や社会に積極的に貢献する姿勢と意欲をもつ生徒を育てる。 A 充実した学校生活を送れた生徒 95%以上(75.4%) A 修学旅行の満足度 90%以上(実施なし)	B	B	B	修学旅行については、延期のため評価できない。	生徒が中心となり企画・実施できる行事を考えさせる。修学旅行は、延期延期、行き先も変更ばかりで生徒に申し訳ない思いである。
第3学年	最終学年としての充実	目的意識をもち、自分自身を変革する努力をすることにより、自己の進路を実現させ、自立した社会人を目指す。 A 1日平均60分以上自主的な学習をする生徒 80%以上(68.8%) A 希望進路を実現させることに「満足している」生徒 90%以上(89.3%)	B	B	B	1日平均60分以上自主的な学習をする生徒 64.8%(7月) 希望進路を実現させることに「満足している」生徒 77.8%	1年次にしっかりと学習指導を行い、家庭学習の習慣をつけることが大切である。各教科が連携を取り課題計画等を考えて育必要がある。進路実現においては生徒自身が自分を知ることができる取組が必要と考える。
		最終学年として自らの活動に誇りを持たせ、学習活動や学校行事等に積極的に取り組ませることにより、充実した高校生活を送り、将来の夢や目標をもたせる。 A 桜井高校に入学して「とても良かった」と思う生徒 70%以上(58.9%) A 自分の将来の目標を見つけることに「満足している」生徒 90%以上(85.5%)	B	B	B	桜井高校に入学して「とても良かった」と思う生徒 59.0% 自分の将来に目標を見つけることに「満足している」生徒 84.3%	修学旅行が中止となったり各行事が縮小されたりとクラスで考えたり活動したりする機会が減り、各行事の大切さを改めて知るきっかけとなった学年である。工夫を凝らし生徒とともに作っていく行事を考えたい。

A:達成割合:100%以上 B:達成割合80~99% C:達成割合60~79% D:達成割合59%以下